

モンゴルの英雄叙事詩に 隠された「二重の意味を 読み説く。」



交流文化学部
藤井真湖 准教授

- 【学歴】
1989年3月 大阪外国語大学（現在は大阪大学）外国語学部モンゴル語学科卒業
1992年3月 大阪外国語大学大学院修士課程修了
（在学中、外務省の交換留学生としてモンゴルへ約1年間留学）
1998年3月 総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（文学博士）
（在学中、文部科学省のアジア諸国派遣留学生制度でモンゴルへ2年間留学）
- 【職歴】
1998年4月 国立民族学博物館COE
1999年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）
2002年4月 国立民族学博物館外来研究員（～2004年3月）
2005年4月 愛知淑徳大学現代社会学部現代社会学科講師
2008年4月 愛知淑徳大学現代社会学部現代社会学科准教授
2010年4月 愛知淑徳大学交流文化学部交流文化学科学科准教授



【藤井先生の主要著作・論文リスト】
○単著 □論文
○「伝承の喪失と構造分析の行方—モンゴル英雄

- 叙事詩の隠された主人公—日本エディタースクール出版部 2001年
○「モンゴル英雄叙事詩の構造研究」風響社 2003年
□「英雄叙事詩「ジャンガル」における「12勇者」—モンゴル英雄叙事詩の数詞解釈—」国立民族学博物館研究報告27巻3号 国立民族学博物館 2003年
□「英雄叙事詩「ジャンガル」における七冲の痕跡—ジャンガルが7歳のときに権力を掌握するモチーフについて—」北東アジア研究別冊第1号 島根県立大学北東アジア地域研究センター 2008年
□「『元朝秘史』第268節におけるイェスイ妃に関する記述—グルベルジン・ゴア妃の伝説からみた解釈—」現代社会研究科研究報告第5号 現代社会研究科 2010年

藤井先生は、珍しい言語を学びたいと外国語大学でモンゴル語を勉強。大学院修士課程でモンゴルの英雄叙事詩に出会い、さらに研究を深めたいと、博士課程は総合研究大学院大学へ進みました。日本はモンゴル研究の歴史学と言語学では世界トップクラスですが、伝承文学の研究者は少数とのこと。国内でモンゴルの伝承文学を目にする機会がないのは、「異文化度が高すぎて、翻訳されても楽しめない」からだそうです。しかし先生は、「今に伝わる伝承物語には、隠れた意味があります。それを読み解き、ほぐれてきた時の面白さは伝えられませんか」と、6年かけて博士論文「モンゴル英雄叙事詩のナラトロジー」研究を完成。これまでの研究で、「モンゴル民族の原点にはチンギス汗が存在し、伝承文学には彼に敗れた亡霊たちの物語が隠されています。それを大きく捉えていきたい」と、テキスト「元朝秘史」に取り組み意気込みを話してくださいました。

私の主な研究領域は、モンゴルのフォークロア（伝承文学）です。修士課程時代に、この研究を本格的におこなうには現地でのモンゴル語と文化の研修が不可欠と考えていたのですが、幸運にも1991年にモンゴル人民共和国（現在のモンゴル国）に外務省の交換留学生制度により留学することができました。当時のモンゴルは社会主義体制から市場経済体制への移行期であり、フォークロアも民族遺産として注目されはじめた時期でした。

帰国後、国立民族学博物館の博士課程に入りましたが、私が研究に本当に目覚めたのはこの場所です。当時は昨年7月に亡くなった梅棹忠夫氏が初代館長をつとめられておりましたが、入学式

のパーティーの席で梅棹先生がご自身の有名な著書『狩猟と遊牧の世界—自然社会の進化—』について私に次のようなことをおっしゃったことは、今でも鮮明な記憶として残っています。「まこさん、あんなのは稚拙だよ。浅い。貴女はもっと深いことをやらなければならない。」

この国立民族学博物館で再度の留学を含む足かけ6年をかけて仕上げた博士論文では、モンゴル英雄叙事詩は明示的には王侯貴族を讃える内容になっているものの、王侯貴族を貶めるといふ真逆の非明示的内容をもっているのではないかという「二重の意味構造」論を提起しました。これはモンゴル英雄叙事詩研究における新説ですが、この研究で興味深く思われたのは、英雄叙事詩の作者が「現実を変える」のではなく、「現実の意味を変える」ことに命を賭して精力を注いだという点です。この論は、モンゴルという領域にとどまらず、言論の自由な空間における言語アートの可能性とその意味を問いかけるものです。

現在、この博士論文の延長上でモンゴルの「古事記」ともいふべき「元朝秘史」の研究をおこなっています。これと密接に関連する研究として、ユーラシア大陸の遊牧文化における馬の隠喩研究もおこなうことで当該文化圏の基層文化の解明に取り組んでいます。